

ブレンディッドラーニングによる心理実習の試み —学部における公認心理師養成課程での取り組み—

橋本 陽介・江上 園子・福丸 由佳

1. はじめに

2017年9月、公認心理師法が全面施行となった。これにより、2018年4月からは、心理学系の学部・学科を有する大学を中心に、同法第7条第1号及び第2号に規定される国家試験受験資格の付与に向け、公認心理師の養成課程が一斉に開始となった。

この流れの中、本学子ども学部発達臨床学科でも、2018年度より公認心理師養成課程を開始した。2020年度後期には、学内で規定する一定の要件を満たした学生が履修可能となる「心理実習」の開講を迎えた。本科目は、公認心理師に求められる知識と技術を習得し、国民の心の健康の保持増進に寄与するための実践力を身につけることを到達目標に、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働の5分野の施設で、80時間以上の見学等による実習をおこなうものとして位置づいている。本学においては、3年次後期から4年次前期の期間を通じて、合計80時間以上の実習時間が確保可能となるカリキュラム構成としている。

そのような中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大を受け、2020年度の開始早々から学内での対面による授業の実施が、困難な状況に陥った。そのため、文部科学省（2020a）の通知および文部科学省（2020b）の事務連絡に基づき、オンラインによる授業の実施が中心となり、一部で対面による授業の実施が取り入れられる形式となった。これにより、様々なオンラインツールを活用しながら、学生の学びの機会を保障することが可能となった。

一方、「心理実習」においても、2020年度後期より保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・

労働の5分野の施設で、現地に赴いての見学実習を実施する予定となっていた。しかし、見学を予定していたいずれの施設においても、感染症拡大の予防に向けた厳戒態勢が敷かれており、現地に赴くことは多くの施設で困難な状況にあった。そのような中、文部科学省・厚生労働省（2020）の事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」により、オンラインを活用した実習も、実習時間への積算が可能となった。これを受け、2020年度後期の「心理実習」については、各施設や感染症拡大の状況を踏まえながら、学内で指定された対面授業実施可能日や施設側からの現地に赴いた実習の承諾を活用した「対面による実習」と、各種オンラインツールを活用した“オンラインによる実習”を組み合わせ、ブレンディッドラーニングの手法を取り入れて実施することとなった。

これまで、医療関係職種の養成課程におけるオンラインによる実習は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大を受け、医師（鋪野・塚本・生坂、2020など）や看護師（益田・小田嶋，2020など）の養成課程での取り組みが、速報的に数多く報告されている。その他、保健師（塩見・細川・平，2020）や薬剤師（有田・竹平，2020）の各養成課程でもその取り組みが報告されている。しかし、公認心理師の養成課程におけるオンラインによる実習は、取り組みの報告がなされていない。加えて、益田・小田嶋（2020）のように、ブレンディッドラーニングの手法を取り入れた実習については、報告が少ない現状にある。従って、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染

拡大という未曾有の状況下で、ブレンディッドラーニングの手法を取り入れながら、心理実習を開始させた本学の取り組みを報告することは、今後の公認心理師養成にとって重要な資料となりうると思われる。

そこで本稿では、本学における公認心理師養成課程でのブレンディッドラーニングの手法を取り入れた心理実習の取り組みを報告し、特に実習時間確保の観点から今後の心理実習を展望する。

2. 2020年度「心理実習」の実施概要

2020年度は、後期（9月～3月）に3年次学生を対象とした「心理実習」を開講した。本実習では、3年次学生が初めて取り組む実習であることから、様々な施設の見学を通じて、公認心理師の活躍が期待される臨床現場の理解を深めることを主なねらいとした。そのため、1か所の施設ごとに、Fig.1に示した流れで見学実習に取り組んだ。

見学実習は、1か所の施設ごとに、まず事前学習として学生が個々に「実習施設・機関の概要」について、Webページなどを用いて調査した。調査する内容は「施設・機関種別と設置根拠法」「機関・施設の運営方針・理念」「職員構成と心理職の役割」「利用者の状況（利用形態・主なニーズ）」「併設する施設・事業」とした。

次に実習①として、学内の教員による事前指導を行った。事前指導では、事前学習で調査した内容の確認を行い、その後、学生同士でのディスカッションを交えながら「実習計画書」を作成することとした。実習計画書は、「実習目的」と「実習目的を達成するための具体的課題」、「実習目的と具体的課題の達成に向けて必要な学習」の3項目を記載する構成とした。学生には、この実習計画書の作成を通じて、各々が実習で学びたいことを実習目的として焦点化させるとともに、その達成に向けて施設の実習指導者から聞き取るべき内容を具体的課題として明確化させた。また、必要な学習の内容については、学生自身での気づきに加え、事前指導を担当する教員からも助言を行った。

これらの取り組みを踏まえ、実習②として、施設での見学実習を実施した。見学実習では、施設の実習指導者からの講話を必須の取り組みとし、可能な場合には学生からの質疑や施設内の見学を実施するよう依頼した。実習終了後には、学生個々で「見学実習日誌」を作成し、後日、施設の実習指導者へ送付してフィードバックを受けることとした。

最後の実習③として、学内の教員による事後指導を行った。事後指導では、各学生が見学実習を通じて学んだことを発表し、受講する学生全員で

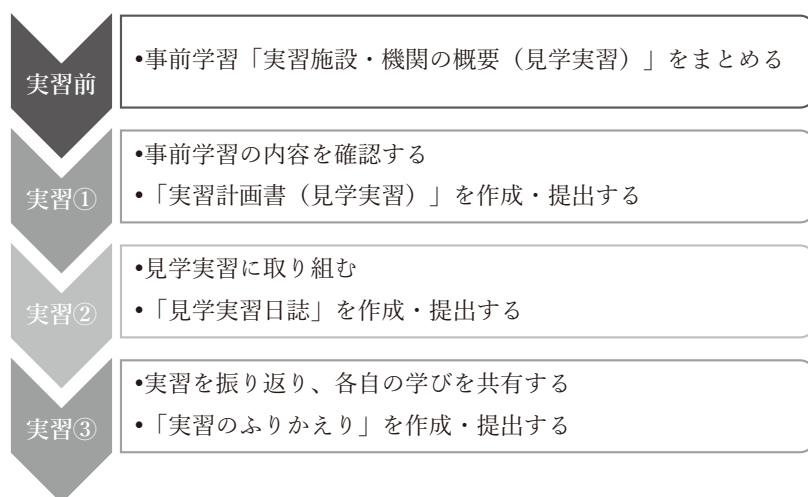


Fig.1 1か所の施設ごとの見学実習の流れ

共有することとした。共有した内容は、各学生が“自分では気づかなかった他の学生の学び”を視点に、「実習のふりかえり」として作成することとした。

以上の流れを1か所の施設ごとに繰り返しながら、「心理実習」を進行させた。

3. ブレンディッドラーニングの手法を取り入れた心理実習の方法

(1) 対面による実習

対面による実習は、以下3つの方法で実施した。

まず、学内で指定された対面授業の実施可能日を活用し、a) 学内の教員による事前指導 (Fig.1の実習①) と事後指導 (Fig.1の実習③) を実施した。これは、学内における従来型の対面授業に類似する形式のものである。また、同じく学内で指定された対面授業の実施可能日を活用し、b) 施設の実習指導者を学内に招いての見学実習 (Fig.1の実習②) を実施した。これは、学内における従来型のゲストスピーカーを招聘しての対面授業に類似する形式のものである。

その他、施設からの現地に赴いた実習の承諾が得られた場合は、c) 現地に赴いての見学実習 (Fig.1の実習②) を実施した。これは、従来から心理実習において想定されていた見学実習の形式である。

(2) オンラインによる実習

オンラインによる実習の実施にあたり、以下3つのツールを使用した。

まず、同期型のリアルタイム配信には、Zoom Video Communications社製のWeb会議システム「Zoom」を使用した。本システムでは、ミーティングホストを務める教員以外、特定のWebページにログインする必要がないため、学生のみならず、施設の実習指導者にも使用してもらうことが容易に可能であった。また、ブレイクアウトセッション機能を活用することで、学生同士でのディスカッションが小グループ単位で可能となった。

また、非同期型のオンデマンド配信には、動画

ストリーミングサイトの「YouTube」を使用した。本学では、全教職員にGoogleアカウントが付与されており、YouTubeとも連動している。そのため、各教員が動画をアップロードすることが可能であり、限定公開の設定を用いれば特定の学生のみに配信することが容易に可能であった。

加えて、学習管理システムには、日本データパシフィック社製のLearning Management System「WebClass」を使用した。心理実習においては、主にWebClassの「資料」機能を活用して、リアルタイム配信 (Zoom) またはオンデマンド配信 (YouTube) のアクセス先URLや、必要となる各種資料の電子データを配布した。また、「レポート」機能を活用して、実習施設・機関の概要や実習計画書、見学実習日誌、実習のふりかえりの記入済み電子データを、各学生から回収した。

これらのツールを活用し、オンラインによる実習は、以下3つの方法で実施した。

まず、Zoomを活用し、d) 学内の教員による事前指導 (Fig.1の実習①) と事後指導 (Fig.1の実習③) や実習オリエンテーションを実施した。これは、学内におけるオンライン同期型のリアルタイム配信授業に類似する形式のものである。また、Zoomを活用し、e) 施設の実習指導者をミーティングルームに招いての見学実習 (Fig.1の実習②) を実施した。これは、学内におけるゲストスピーカーを招聘してのオンライン同期型のリアルタイム配信授業に類似する形式のものである。

その他、YouTubeを活用し、f) 学内の教員による非同期型のオンデマンド教材の配信を実施した。これは、繰り返しの視聴が必要となる実習オリエンテーションで使用した。

4. 2020年度「心理実習」の実施実績

前章で述べた通り、2020年度の心理実習においては、対面による実習の3形式とオンラインによる実習の3形式の計6形式を活用して、実習を進めた。その結果、Table 1に示す通りに、実習を実施することが可能となった。

Table 1 2020年度「心理実習」の実施実績一覧（注）

回	実習施設	実習内容	実習方法（※）	成果物	実習時間
1	－	心理実習オリエンテーション①	学内オンライン	実習の抱負	1.5H
2	－	心理実習オリエンテーション②	オンデマンド	実習施設・機関の概要	1.5H
3	保健医療分野施設A	事前指導（実習①）	学内オンライン	実習計画書	1.5H
4	保健医療分野施設A	見学実習（実習②）	現地見学	見学実習日誌	3H
5	保健医療分野施設A 保健医療分野施設B	事後指導（実習③） 事前指導（実習①）	学内オンライン	実習のふりかえり 実習計画書	1.5H
6	保健医療分野施設B	見学実習（実習②）	オンライン見学	見学実習日誌	3H
7	保健医療分野施設B	事後指導（実習③）	学内オンライン	実習のふりかえり	1.5H
8	司法犯罪分野施設A	事前指導（実習①）	学内オンライン	実習計画書	1.5H
9	司法犯罪分野施設A	見学実習（実習②）	学内見学	見学実習日誌	1.5H
10	司法犯罪分野施設A	事後指導（実習③）	学内オンライン	実習のふりかえり	1.5H
11	保健医療分野施設C	事前指導（実習①）	学内オンライン	実習計画書	1.5H
12	保健医療分野施設D	事前指導（実習①）	学内オンライン	実習計画書	1.5H
13	司法犯罪分野施設B	事前指導（実習①）	学内オンライン	実習計画書	1.5H
14	司法犯罪分野施設B	見学実習（実習②）	オンライン見学	見学実習日誌	3H
15	司法犯罪分野施設B	事後指導（実習③）	学内オンライン	実習のふりかえり	1.5H
16	教育施設A	事前指導（実習①）	学内オンライン	実習計画書	1.5H
17	福祉分野施設A	事前指導（実習①）	学内オンライン	実習計画書	1.5H
18	保健医療分野施設D	見学実習（実習②）	オンライン見学	見学実習日誌	3H
19	保健医療分野施設C	見学実習（実習②）	オンライン見学	見学実習日誌	2H
20	福祉分野施設A	見学実習（実習②）	現地見学	見学実習日誌	2.5H
21	保健医療分野施設D	事後指導（実習③）	学内オンライン	実習のふりかえり	0.75H
22	保健医療分野施設C	事後指導（実習③）	学内オンライン	実習のふりかえり	0.75H
23	－	学内実習	学内オンライン	学内実習記録	1.5H
24	教育施設A	見学実習（実習②）	現地見学	見学実習日誌	3H
25	教育施設A	事後指導（実習③）	学内対面	実習のふりかえり	0.75H
26	福祉分野施設A	事後指導（実習③）	学内対面	実習のふりかえり	0.75H
27	保健医療分野施設E	事前指導（実習①）	学内対面	実習計画書	1.5H
28	保健医療分野施設E	見学実習（実習②）	現地見学	見学実習日誌	3H
29	保健医療分野施設E	事後指導（実習③）	学内対面	実習のふりかえり	1.5H
				合計時間	51H

※実習方法

- ・学内対面：学内の教員による対面指導
- ・学内見学：施設の実習指導者を学内に招いての見学実習
- ・現地見学：現地に赴いての見学実習
- ・学内オンライン：学内の教員によるオンライン同期型の指導
- ・オンライン見学：施設の実習指導者を招いてのオンライン同期型の見学実習
- ・オンデマンド：学内の教員による非同期型のオンデマンド教材の配信

注）この実施実績は、本論文投稿時点での予定も含まれている

2020年度の後期においては、計29回の実習を実施し、9施設の見学実習を実施することが可能となった。実習方法の内訳をみると、学内の教員による対面指導（学内対面）が4回、学内の教員によるオンライン同期型の指導（学内オンライン）が15回、学内の教員による非同期型のオンデマンド教材の配信（オンデマンド）が1回、施設の実習指導者を学内に招いての見学実習（学内見学）が1回、施設の実習指導者を招いてのオンライン同期型の見学実習（オンライン見学）が4回、現地に赴いての見学実習（現地見学）が4回となっている。

また、各回では、Table 1に示した通り、必ず成果物の作成と提出を求めている、学内の教員はその内容を確認することとした。記載された内容から、確実な実習への取り組みが確認された場合は、各学生の実習時間を積算していくこととしている。そのため、計29回の実習すべてにおいて、確実な取り組みが確認された場合には、計51時間にわたるの実習時間が積算可能となる。

5. まとめ

以上のように、本学では、2020年度後期の「心理実習」において、ブレンディッドラーニングの手法を取り入れたことにより、9施設での見学実習の実施が可能となった。加えて、3年次後期のみで、最大51時間の実習時間を積算が可能となり、合計80時間以上を必要とする実習時間の半分以上を確保することができた。これらは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大が続く中で、その時々や各施設の状況に合わせて、柔軟に手法が選択できたところに要因があると考えられる。また、本学においても、オンライン授業が主流となる中で、オンラインによる実習のみならず、対面による現地見学や学内見学ができたことは、受講する学生のモチベーション維持にもつながったと推察される。

今回、このようにブレンディッドラーニングの手法を取り入れた実習が可能となったのは、新型

コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大という状況下における特例的な措置（文部科学省・厚生労働省、2020）によるものである。しかし、実際に実施してみると、見学実習の受け入れを承諾した施設は少なくなく、実習時間も十分に確保できることが明らかとなった。一方で、実習を受け入れる各施設では、日々の支援業務に多忙を極める中で、新たに創設された「心理実習」について、試行錯誤を繰り返しながら受け入れを進めている状況にある。また、学生自身も国家試験受験資格取得に向け、大学院への進学準備や数少ない実務経験施設への就職活動と並行しながら、合計80時間以上の実習に取り組まなくていけない現状にもある。従って、ブレンディッドラーニングの手法を取り入れた心理実習は、特例的な一過性の取り組みで終止することなく、その柔軟性をいかすことで受け入れ施設や学生への過度な負担軽減にもつながるため、継続すべき取り組みではないかと考えられる。

6. 今後の課題

今後の課題としては、以下2点が挙げられる。

1点目は、実際に現地を見学することによって得られる学習内容の保障についてである。今年度の心理実習においては、オンライン見学や学内見学を実施した際、各施設の実習指導者の様々な配慮や工夫により、施設内部の写真や動画を講話に交えたことで、学生がその様子を学習することができた。しかし、各施設の雰囲気やスタッフ・利用者の動きなど、現場の臨場感を味わうまでの情報を得るには、限界があることは否めない。従って、特に現地の見学を伴わない見学実習の際に、どのような代替手段を活用することで、実際の現地見学に近似する学習内容が保障可能となるか、検討していく必要がある。

2点目は、受講する学生の視点に立った種々の検証である。今年度の心理実習では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大という状況を受け、学内や各施設の事情により、ブレン

ディットラーニングの手法を取り入れることとなった。そのため、本学でも心理実習の開始年度であったものの、受講する学生からの意見などを反映させながら進めることは困難な状況にあった。従って、それぞれの実習形態において、学生がどのような印象を形成し、どの程度の学習効果を得たか、検証していく必要がある。加えて、ブレンディットラーニングの手法を取り入れることで、実際に学生の負担軽減となるか、受け入れ施設側の負担とも対比させながら、検証していく必要がある。

以上を踏まえ、心理実習における“対面による実習”と“オンラインによる実習”のより効果的なブレンド方法を検討していくことが、今後の大きな課題となる。

文献

- 有田悦子・竹平理恵子(2020)「オンライン医療面接「患者心理とコミュニケーション」の試み:一教育効果と留意点一」薬学教育, 早期公開.
- 益田美津美・小田嶋裕輝(2020)「バーチャル・シミュレーションを用いたハイブリッド型成人看護学実習の取り組み」医学教育, 51(5), 557-560.
- 文部科学省(2020a)「令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知)」
- 文部科学省(2020b)「遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について」
- 文部科学省・厚生労働省(2020)「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」
- 鋪野紀好・塚本知子・生坂政臣(2020)「千葉大学総合診療科におけるオンライン臨床実習の取り組み」医学教育, 51(3), 286-287.
- 塩見美抄・細川陸也・平和也(2020)「京都大学におけるCOVID-19流行下の保健師課程教育実習(2) オンライン代替実習の成果と課題」保健師ジャーナル, 76(11), 922-925.